

兒童心理學文獻抄 七

牛 島 義 友

幼兒の言語の發達

動物と人間とを區別する標準として言語の有無を擧げる

人が多い、併し養鶏家は鶏の啼聲によつて彼が食物を欲してゐるのか、産卵する爲に巢を探して居るのか、或は友を呼んで居るのか、外敵襲來を告げて居るのかをよく聞き分ける事が出来る。又アメリカの動物心理學者ヤーキスは音楽家と協力してシンバンデーの音聲を音譜に記りその聲に幾通りも種類があり、又單に強弱長短の差のみならず音律の異つて居る事を明らかにして居る。之で見ると動物でも自己の氣持を表はす事並びに他のものにそれを傳へる云ふ言語の重要な機能を有して居る事が分る。併しビュラ

—(K. Bühler: Die geistige Entwicklung des Kindes

1918)も擧げる如く言語の第三の機能即ち敘述—物の名前を云つたり、事柄を説明する云ふ風な事—に於ては動物と人間との間に越ゆべからざる間隔がある。

嬰兒が此の言語的敘述を爲し得るには出生後一年間程の長い準備時代を経なければならぬ。故に兒童語の研究は準備時代の叫聲とか喃語等の音聲學的研究から始めねばならない。

此の幼兒期の言語の研究には完全なものが外國には非常に澤山あり、言葉の變化、増加の状態を毎日日記に記つて數年に亘つた記録が少くない。日本に於ても此の種の研究は割に多いが完全に資料の發表されて居るのは、久保氏の研究である。

久保夏英、幼兒の言語の發達、兒童研究所紀要卷五、大

氏は自己の三人の男の子を出生から滿六歳に至る迄繼續的に觀察して居る。先づ言語の發達を三期即ち叫聲期、單語期、文章期に分けて觀察してをる。此の中、生後二ヶ年迄の分丈を見る事とする。

一 叫聲期、子供の泣聲は生後數日間は殆ど區別をする事が出来ぬが、二十日目頃に始めて饑え又は痛みを表はす泣聲を其他の泣聲から區別する事が出来た。此の頃の泣聲は動物が色々の慾望に應じて發する所の種々の泣聲と全く同じであつて、聲の強弱、高低、長短、急緩の相異がある丈で、色々の音質が出されるものではない。人間の言語は次の喃語の時から始まるものである。即ち久保氏の場合五十七日目に觀察者が舌打ちし乍ら子供の頬をつゝいた所子供が笑顔ををし、ウンガー、ウンガーと聲を發した。かう云ふ單音は主として氣分の好い時に發せられると云ふ事である。ビューラーは此の子供の快適な時に遊戯的になして居る發音運動を喃語の獨り言と云つて居るが、此の時期に於て色々な語を發音する事を覺える。これ以前の時期は主

してア、エ、オ、ウ等の母音が發音されて居つた丈であるが、此の頃から子音を發音しまつ唇音のB、P、Mが表はれ、咽喉音、R、Ch、Kは一番あゝに表はれてくることばれてゐる。久保氏の場合、母音の出現した順序は長男はウアエイオ、次男ウアアオイエ、三男アウエアオイで、子音は長男ク、ン、ハ、ツ、バ、ブ、バ、ヤ、チャ、マ、ブ、ボ、カ等であつた。又此の喃語にはまだ一定の意味は具つて居ないが、併しやがて多くの意味が之から分れて來る意味の源が含まれて居る。此の時迄の嬰兒の音聲はいはゞ萬國共通語であるが、此の時から始めて各國語に分化する土臺が出来て來るのである。

二 單語期、子供が最初に有意味の言葉を發する時期を始語期と云ひ、精神發達の重要な表徴である。二百二十九日目に乳その他のものをねだる時にアーンと云ひ、三百四十日目に自動車の事をブーと云つた。而して滿一ヶ年の終迄に長男は四語、次男は三語、三男は五語を發して居る。更に生後二ヶ年迄の有意味語を數へて見るに長男二百語、三男二百五十四語に上つて居る。此の急激な語彙の増

加状態をも少し精詳に調べて見やう。之に就ては大脇氏が同じ様に自己の二女に就て観察されて居るが其結果を述べる事にしやう。

大脇義一 Die ersten zwei Jahre der Sprachentwicklung des japanischen Kindes Toh. Psych. Fol. 1933 (日本兒童生後二ヶ年の言語發達)

氏は毎月に於ける新しく増加した語彙の數を次の如く表示して居られるが、之を見るに月によつて著しく増加する月と停滞して居る月があり、言語の發達は波狀形をなして居る。

| | | | | | | | | | | | | | |
|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 月 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| 長 | 1 | 3 | 1 | 7 | 6 | 9 | 18 | 15 | 5 | 27 | 65 | 27 | 72 |
| 女 | 0 | 3 | 9 | 10 | 10 | 26 | 16 | 30 | 27 | 59 | 54 | 34 | 128 |

而も、後に至る程一ヶ月の増加量が非常に多くなり、十二ヶ月目には次女は百二十八語も新しく覺えて居る。此の増加状態は更に三歳、四歳になる程激しくなるが、之は又後の機會に述べる事にする。

次に此の喋べる言葉の種類を見やう。久保氏の結果に基いて品詞分けて見るに次の如く、名詞が最も多く、動詞、形容詞、副詞、感動詞の順になつて居る。

| | | | |
|----|-----|-----|----|
| 品名 | 動助形 | 副代助 | 感動 |
| 詞 | 詞 | 詞 | 詞 |
| 長 | 133 | 30 | 12 |
| 男 | 9 | 5 | 2 |
| 男 | 162 | 36 | 20 |
| 男 | 17 | 7 | 1 |
| 男 | 11 | | |

之は新しく使はれて居る言葉の分類であるが、平常毎日何語位喋べり、如何なる品詞を多く使ふか云ふ事も調べて居る。即ち長男の滿二歳二ヶ月の時に一週間の間毎朝午前九時から十時迄一時間の間に子供の自然に喋べつた言葉を全部速記した所七日間の平均は次の様になつて居る。即ち名詞、八十八・七、代名詞三十五・一、動詞七十六・七、形容詞三十三、助動詞四十九・三、副詞三十八・三、接續詞一・一、助辭九十・七、感動詞二十八・四になつて居る。之によるに平素喋べるのは名詞と動詞と助辭が最も多くて接續詞等殆ど使はれて居ない事が分る。此の事は子供はいつも短かい文章で、云はんミする事を直載に修飾なしに喋べつて

るる状態をよく表はして居る。以上の一時間の總語数は四百四十一・四語となる。もし假に起きて居る十二時間の間同様に喋べつて居るをすれば一日中の語数は五千二百九十六・八語と云ふ夥しい数になる。

尙此の頃の子供の言葉と云ふものは決して大人と同じ様な言葉ではない。所謂子供のなまりがあるがその形式を次の六つに分けてをる。省略(コーキ、飛行機の意)、轉化(チャトウ、砂糖)、類化(チャメユ、キャラメル)、轉位置(コモド、子供)、添加(オンボン、お盆)、融合(オーチャイ、大きい小さい)である。

序でに子供の言ひ誤まりに就て少しく詳しく験べて見やう。之に就て大西氏が次書の中に於て、

大西雅雄、應用音聲學、口語の發音、昭和六年

東京の五歳以下の子供約六十名の中から言葉の誤まりを五百程集めてその分類をなして居る。

一、亂れ音、之は音節の亂れたもので、例へば「イタダキマス」を「イタキリマス」と誤まり、「アベコベ」を「アコベ

と」誤まる。

二、音節の省略、「イツテイラッシャイ」を「イツチャイ」、「チクオンキ」を「オンキ」。

三、子音の脱落、「ジドーシャ」を「ジョーチャ」、「ラッバ」を「アッパ」とする。

四、「チ」音化作用、(t)音は嬰兒には容易に出される音なので、何でも此の音に化す傾向がある。「サミセン」―「チャミセン」、「ウルサイ」―「ウルチャイ」、「クツ」―「クチュ」。

五、「ラ」行くづれ、之は舌の廻らぬ者に多い。ローソク↓ドローソク、ラッパ↓ダッパの如し。

六、間に合せ音。他の音で代用するもので、カハイイ↓カバイイ、オナベ↓オナメ、ミシン↓ニシン。

七、同化作用と轉置作用、同化作用とは強い觀念や困難な發音に影響されて、其前後の音が美化せるものを云ふ。

例へば、コマゴメ↓コマモメ、アオヤマ↓アヨヤマ、ジドウシャ↓ドドウシャ。

轉置作用とは前後の音が位置を換へるものテヌグイ↓テグヌイ、チャガマ↓チャマガ。

其他以上の諸作用の複合せるものがある。オキヤクサン
↓オチャツチャン、タマゴ↓タガモ。

三 文章期、始めの中は所謂單語文の時代であつて例へば幼児が「イヌ」ミ云つた場合には犬が来たミか、犬が吠えたミか、犬よ、來い、ミ云つた風な意味を表はすので、一語で一文章を意味して居る。此の時代が六ヶ月位も過ぎて始めて、二、三語を合せて文章を形造つて來る。二語文の時は名詞と動詞丈であるが、三語以上になるミ色々複雑な形を示して來る。此の場合文章構造の一條件ミして、印象の鮮明な物が先に置かれる、例へば(バッヒンブー(汚ない自動車)あつた。坊見た)の類である。

以上の三段階を経て兒童語が發達して來るがその時期は各兒童によつてそれ／＼異つて來る。智能の高い子供は一般に早く言葉を言ひ初めるが、又環境の影響によつて言語の發達が著しく異なつて來る。此の問題に就ては山下氏の紹介を参照されたい。

山下俊郎、環境と言語の發達、口語教育講座

言語開始の時期丈に就て見てもヘッツェルの研究によれ

ば社會的經濟的に上層の者ミ下層な者この相異は次の如く前者では一年六ヶ月で全部の子供が言語を言始めて居るが後者では二ケ年もかゝる(次の數字は其年齢に於て言語を言始めた者の割合である)。

| | | | | |
|----|--------|---------|---------|-------|
| 上層 | 六十五 | 九十一 | 一〇〇 | 一〇〇% |
| 下層 | 四〇 | 七十一 | 一〇〇% | |
| | 十二ヶ月以前 | 一年三ヶ月以前 | 一年六ヶ月以前 | 二ケ年以前 |

又兄弟の有無によつても異つて來る。普通弟は兄より早く言ひ始めるミ云はれて居る。併し最近の研究によるミ兄弟の在る事が言語開始を促すミのみ言へず、然らざる場合も多くて何等決定的の事は云ひ得ない状態になつて居る。

尚以上の外に言語發育状態を診斷する爲の諸検査があるが、紙面の都合上文獻をあげるに止めてをく。

石川七五三二 幼児發音検査法の標準化 愛知縣兒童研究所紀要第五輯

加藤正英 二歳兒に於ける言語發達尺度 心理學論文集

第四輯 昭和八年

尚以上に摘録した以外の主要邦文獻

澤柳・長田・田中 兒童語彙の研究 大正八年

第四輯 昭和八年

城戸幡太郎 子供ニ國語 子供研究講座第五卷 昭和四年

柳田重久 幼兒の言語發達 國語ニ國文學 昭和五年

年

松本金壽 兒童の言語 教育科學第十九冊 昭和八年

同 兒童語の表現形態 教育心理研究第六卷

同 兒童に於ける言語の發達 最近の心理學の國

昭和八年

語教育の問題

城戸・井原 言語の教育的環境に就いて 心理學論文集

童謠募集について

先月號に募集發表致しましたがもう各地の皆様のお話をつぎつぎにおよせたいといて居ります。さうぞ奮つて應募なさいますやうおすゝめ致します。

募集規定

- 一、應募作は幼兒にうたはせるに適するもので、主題及長さ等は隨意、但し必ず創作のこゝこ
- 一、應募篇數任意
- 一、原稿用紙にペン書のこと、(原稿は一切返却せず)
- 一、應募者は宿所氏名(誌上匿名隨意)奉職園(校)名明記のこと、
- 一、宛名 日本幼稚園協會童謠研究部
- 一、締切 昭和十年六月十五日
- 一、選 本協會童謠研究部委員

入選作若干は専門家に依頼して作曲の上本誌に掲載し、帶留或はピンを賞品として贈呈致します。

尙御不明の點は往復はがきにて本協會にお問合せ下さい